



石川県立  
にしきがおか  
金沢錦丘高校

思考力育成

# 全校体制で言語活動を取り入れ、論理的・批判的思考力を育成

◎1899年創立の石川県第二中学校が前身。2004年度に石川県立金沢錦丘中学校を併設し、県内唯一の公立の併設型中高一貫校となる。「弘毅篤学」を校訓として、高い志を育み、豊かな心と知性、健やかな身体を培い、地域や国家、国際社会の持続可能な発展に貢献できる人材の育成を目指す。

設立	1963(昭和38)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約320人
13年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、一橋大、金沢大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに155人が合格。私立大は、慶應義塾大、法政大、明治大、立教大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ468人が合格。
住所	〒921-8151 石川県金沢市窪6-218
電話	076-241-8341
Web Site	<a href="http://cms1.ishikawa-c.ed.jp/~nisikh/NC2/">http://cms1.ishikawa-c.ed.jp/~nisikh/NC2/</a>

## 変革のステップ

### 背景

◎中高一貫校となり進学実績が向上する一方、生徒の学習は暗記中心で、論理的・批判的思考力の育成に課題があった

STEP 1

### 実践

◎表現学習教材の導入、コミュニケーション主体の科目の設置、言語活動重視の授業などにより思考力を高める

STEP 2

### 成果

◎国公立大合格者の実績が過去10年間で最高を記録。論理的・批判的思考力の向上を実感する生徒が増加

STEP 3

## 暗記中心の学習が 学力向上の妨げに

石川県立金沢錦丘高校が、2012年度から言語・表現活動の充実に取り組み始めた背景には、生徒の論理的・批判的思考力の低下という課題意識があった。04年度に併設型中高一貫校となって以来、進学実績の面では着実に成果を上げてきた。しかし、それは成績上位層のけん引によるものであり、成績中・下位層との学力の差は大きかった。加えて、新たな課題も浮き彫りになっていった。表純一校長はこう言う。

「本校に赴任した頃の指導は、多くの教科が復習中心だったため、生徒には授業で習ったことを覚える暗記型の学習に偏る傾向が見られました。しかし、そうした短期記憶に頼る学習では、覚えたことの多くは定期考査が終われば忘れてしまいます。確かな学力を身に付けるためには、知識の体系化に必要な論理的・批判的思考力を育成することが必要だと考えました」

教務主任で物理担当の多井伸明先生も、生徒の特徴を次のように述べる。

「定期考査で不正解だった問題を再テストすると生徒はきちんと答えられますが、少し内容を変えて同じような問題を出すと、もう出来なくなる。生徒は単に解法の過程を覚えているだけで、なぜそういう解き方をするの

かという本質まで理解していませんでした」成績中・下位層の学力を底上げして学校全体の学力向上を図ること、そして、10年後、20年後の社会で活躍できる力を育むためには、生徒の論理的・批判的思考力の育成が課題だった。

## 言語活動主体の総合学習で コミュニケーションの型を習得

同校が論理的・批判的思考力育成の柱の1つ



石川県立金沢錦丘高校校長  
**表純一** おもて・じゅんいち

教職歴37年。同校に赴任して3年目。「目の前の生徒の実態把握が全ての出発点である」



石川県立金沢錦丘高校  
**多井伸明** たい・のぶあき

教職歴32年。同校に赴任して4年目。主幹教諭  
教務主任。「生徒の可能性は誰にも決められない」



石川県立金沢錦丘高校  
**三藤加代子** みふじ・かよこ

教職歴26年。同校に赴任して3年目。1学年主任  
「生徒のチャレンジ精神を育てる指導を心掛けていきたい」



石川県立金沢錦丘高校  
**浅井千雅** あさい・ちか

教職歴6年。同校に赴任して6年目。1学年担任  
「常に前向きに！可能性は無限大」

\*2013年4月から、表校長は石川県教育委員会教育次長兼教員指導力向上推進室長に、多井先生は石川県立小松工業高校教頭に着任されています

に据えているのは、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)で実施する「表現サポート学習」だ。ベネッセの『表現トレーニング』(\*1)を教材とし、個人ワークやグループワークを通して、自分の考えを表現する方法を学ぶ。1年次では、『表現トレーニング』を使い、自分の意見を述べるために必要な力を段階的に身に付けていく。そして、2年次では、身近なテーマをさまざまな角度から考察して、自分の考えを整理すると共に、グループワークで他者の意見を知ることを通して、総合的に表現力を高めていく。

「表現活動の一環として小論文学習を行ってききましたが、自分1人で考えて書くだけでは思考が深まりません。表現サポート学習は、大勢の人の意見を読んだり、聞いたり、評価したりすることによって、自分の考えを広げ、深めることを狙いました」(多井先生)

毎時間、授業の導入には、ペアワークの「問答ゲーム」を取り入れた。「あなたは○○が好きですか」「○○と△△のどちらが好きですか」といった簡単な問いを設定し、相手に自分の考えを筋道立てて述べたり、情報を正しく伝えたりする。答えは「好き」「嫌い」など与えられた立場で意見を述べ、終わると立場を変えて同じ問答を繰り返す。ここで大切なのは、問答時のルールだ。話す時は、主語や目的語を明確にする、根拠や理由を述べる、他人の意見を尊重

するというルールにのっとる。そうして、ディベートやディスカッションにつながるコミュニケーションの型を身に付けられるようにした。

## 言語活動の達成度を評価する 「論理力テスト」を試行

論理的・批判的思考力の育成では、学習の成果をどのように評価するのも課題となる。同校では、『表現トレーニング』の成果を評価する方法として「論理力テスト」を試験的に作成した。

「論理的・批判的思考力を測る場合、定性的な評価になりがちですが、それでは時間が掛かる上に、評価者によって結果にぶれが生じる可能性があります。論理力テストによって定量的な評価を行うことは、そうしたぶれをなるべく少なくするためのアプローチの1つだと考えています」(表校長)

論理力テストは、国語、地歴公民、理科、英語の各大問1問、計4大問から成る。試験時間は45分だ。問題は一見、生徒にとって未習内容に思えるが、実は解答に必要な知識は義務教育レベルだ。「このグラフを見て、考えましょう」「このデータから論理的に考えると、どういう解答になりますか」というように、知識量よりも、いかに論理的に考えられるかが問題を解く鍵となっている。

\*1 ベネッセの小論文・表現学習教材。書いて伝えることを通して、生きた表現力を総合的に育成することを目指している。  
\*プロフィールは2013年3月時点のものです

## 「LC探究」で英語による 論理的・批判的思考力の向上を図る

総合学習と並ぶもう一つの柱は、英語による論理的・批判的思考力の養成だ。12年度に週1時間の「LC (Logical Communication) 探究」を学校設定科目として設置し、論理的・批判的に英文を読む力や、自分の考えを論理的に積み上げ、英文で書く力を育成する。

授業は、グループワークやディベート、プレゼンテーションなどを中心に進める。テーマは「制服はあった方がよいか」「夏休みの宿題は必要か」といった生徒に身近な話題から、「日本サッカーを強くするためには何が必要か」「TPP加盟の是非について」といった社会的問題までさまざま。英語科担当の三藤加代子先生はテーマの狙いについて次のように述べる。

「テーマは、生徒が考えやすく、理由を述べやすい内容を選び、最後は必ず自分の意見を書かせます。『表現トレーニング』と同じテーマを取り上げ、英語で討論することもあります。一度、総合学習で取り組んでいるので、より考えを深める意味でも有効です」  
教材の大半は教師の自作だ。サッカーがテーマの時は、新書を教師が英訳してディベートのテキストにした。TPPの議論の際は、統計データなどの資料を用意。生徒にTPPについての英文を速読させた後、教師が英語で解説した。

「授業前に英語科で勉強会を開いたり、社会科の先生に質問したりして、私たち自身がTPPについての理解を深めるところから始めました。議論の際は、結論を導くことよりも、それぞれの意見や理由が論理的であるかどうかというところに着目します。結論が出なくても、論理的に資料を探究し意見が言えているかどうかが重要なのです」(三藤先生)

## 他教科とのコラボ授業で 社会への視野を広げる

「LC探究」では、社会の事象に対する生徒の視野を広げるために、他教科との「コラボ授業」も行っている。12年度の1年生では、家庭科、物理とで行った。家庭科とのコラボ授業は、消費問題やごみ問題をテーマとした。まず、家庭科の授業(1・5時間)で日本語でグループワークをさせ、生徒にテーマへの意見や考えを深めさせた上で、「LC探究」の授業(2時間)では、同じテーマを英語でディスカッションさせた。家庭科の浅井千雅先生は、授業で工夫したことを次のように話す。

「家庭科の授業では、テーマに対する理解を深めると共に、10年後の自分ならどうか、子どもを持つ母親なら、大学の研究者ならというように、生徒にさまざまな立場を与えて議論させました。同じテーマでも、立場によ

ってさまざまな捉え方があることに、生徒は気付いたのではないかと思います」

物理とのコラボ授業では、原子力発電の是非を考えさせた。1年生では物理を履修しないため、多井先生が総合学習で放射線や原発の仕組みなどについての講義と実験を行い、それを受けて「LC探究」で原子力発電や原発事故についての意見を英語で発表させた。

## 指導力向上には教師自身の 論理的・批判的思考力の向上が必要

総合学習や学校設定科目だけではなく、各教科の授業や定期考査のあり方も変わりつつある。定期考査では、全教科で、論理的・批判的思考力を問う問題を1問入れることとしている。授業でも、言語能力を高める活動を取り入れる教科が増えている。例えば、「英語I」では、ペアワークで必ず「あなたはこう思いますか」というオープン・クエスチョンを入れて、相手にその理由を答えさせるようにしている。「私はこう思います。なぜなら……」というように、筋道立った話し方をさせることで、論理的・批判的思考力を高めるのが狙いだ。

「総合学習だけで論理的・批判的思考力を身に付けさせようとすると、大学入試には関係ないからと言って力を入れない生徒が出てきます。教科学習の中で論理的・批判的思考



力を問う課題を出すことで、それが入試を突破するために必要な力であることを、生徒に気付かせたいと思います。教師自身も、生徒に学力を付けさせるためには、思考力を高める活動を取り入れることが重要であると実感するのではないのでしょうか」（表校長）

年2回、互見授業を実施し、各教科の言語活動のノウハウを学校全体で共有している。その時期には、全教師が授業を公開し、少なくとも担当教科と他教科の各1教科を参観する。公開する教師が、今回の授業での工夫点を「授業の見どころ」として公表し、参観者は該当部分についての意見や感想をフィードバックする。

生徒の論理的・批判的思考力を高めるには、教師自身も思考力を高めなければならない。それは、表校長が常に教師に求めていることだ。

「生徒への授業アンケートや模試の結果データなどの分析では、一面的な見方ではなく、もっと別の見方が出来るのではないか、別の要素を合わせてクロス集計することで違う側面も見えてくるのではないかといったことを、日々の業務の中でも常に問い掛けるようにしています」（表校長）

日常会話でも、「論理が飛躍し過ぎではないか」「その話の根拠は何か」など、より深い理由や論拠が問われる。教師自身が情報を論理的・批判的に整理する力が常に求められており、それが教師を大きく成長させているのである。

## 個別学力試験で得点を伸ばし 志望実現を果たす生徒が続出

改革の成果は徐々に表れ始めている。13年度大学入試では、センター試験の結果が例年より大幅に落ち込んだが、生徒は個別学力試験で大きく盛り返した。最終的には国公立大合格者数が155人で、うち金沢大合格者数が49人を記録。過去10年で最高の実績を上げた。

「論理的に問題文を読み込む力がないと、個別学力試験の問題に解答できません。順序立てて思考を積み重ねていく訓練を徹底したことが、大学入試の結果にもつながっているのではないのでしょうか」（表校長）

生徒へのアンケート結果では、「論理的思考力が付いた」「社会的な問題に関心を持つようになった」などの項目で肯定的な回答が多い。また、授業中の話し合いでも「このグラフより、このような傾向が読み取れたから」などと、根拠を踏まえて結論を述べる生徒が多くなった。

今後の課題は、日々の言語活動が確実に学力の向上につながっているということを生徒に実感させることだと、多井先生は話す。

「総合学習や『LC探究』の活動が自分の学力を高めていることを、生徒が実感しきれていないように思います。自分の成長が客観的に分かる評価法を確立して、生徒の意欲を更に高めていきたいと考えています」

## 情熱 若手教師が語る、指導変革への

### 教師のチャレンジが 生徒の可能性を広げる

1学年担任 浅井千雅

私は家庭科でしか出来ないような、社会問題や生活の知恵について生徒に考えさせる授業を目指してきました。3年程前からは授業に言語活動を取り入れ、私なりに工夫を重ねてきました。しかし、グループワークや発表に生徒は生き生きと取り組むのですが、どうしても「楽しかった」「面白かった」といった感想レベルで終わっていました。その原因を突き詰めていくうちに、自分は思考を深める活動が何かを考えていないことに気付きました。そんな折、表校長が赴任され、学校を挙げて思考力育成のための言語活動が始まりました。その中で、活動ではルールづくりが大切なこと、「感想」ではなく「考えたこと」をまとめさせるなど、さまざまなことを学びました。生徒も今は活動に慣れ、更に深い議論が出来るようになってきたと思います。

私はこれまで、校内の取り組みだけではなく、校外の方とのワークショップや講演会の聴講など、自分を高めるための場を数多く与えてもらいました。そうした機会を積極的に利用し、私自身が失敗を恐れずチャレンジすることで、生徒の可能性も広がっていくのではないかと考えています。また、その中で得た失敗経験を整理して、授業改善や指導スキルの向上につなげていくことも大切です。生徒に考えさせるだけではなく、私自身が思考力を向上させて、生徒のため、学校のために何が出来るかを考えながら、精一杯取り組んでいきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2006年2月号指導変革の軌跡「青森県立三本木高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)